

「商業資本実存条件としての

商品流通（市場）について」… (1)

谷 川 宗 隆

目 次

ま え が き

〔一〕 単純な商品流通形式について

- (a) 問 題 限 定
- (b) 通説による「単純な商品流通形式」について
- (c) 単純な商品生産と流通形式について
- (d) 通説における商品流通形式の検討
- (e) 総 括

ま え が き

周知の如く、市場理論は『資本論』第二卷第三篇において説明されている。

とはいえ、山田盛太郎教授が名著「再生産過程表式分析序論」において指摘されている如く、再生産論は第二卷第

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1) (谷川)

三篇の位置にのみつきるのではなく、『資本論』総体が前提となっている。とすれば、次の問題が生ずる。

まず第二巻第三篇は、第二巻総体においてみれば、第二篇、第一篇を前提としている。この場合、第一篇、第二篇が如何なる内的論理において第三篇の準備をなしているのかという問題が生じる。このことを明らかにするのには、第一篇↓第二篇↓第三篇という「上向」の論理と共に、逆に、第三篇を第二篇に第二篇を第一篇に還元する「下向」の論理の追求が必要ではないかと思われる。

更に、かかる還元をして始めて第一巻と第二巻、第二巻と第三巻との連けいが明らかとなるのではないかというところである。

所で、以下、かかる大きな課題を直接に問題とするのではない。かかる課題を解明する準備として、まず第三篇の第一篇への還元を形式に着目して試みようとするものである。しかも、第三巻、第四篇「商品資本と貨幣資本の商品取扱資本と貨幣取扱資本への転形（商人資本）」の解明に必要な限りにおいてである。従って、標題を「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」とした。⁽³⁾

序

『資本論』は第三巻、第四篇、第十六章「商品取扱資本」において、まず第四篇が第二巻を前提としている点を述べた後、次のように問題を提起している。

1、商業資本 $G-W-G'$ の W は社会的総資本の再生産からみれば、商品資本に外ならないこと。

2、商業資本 $G-W-G'$ の G は社会的総資本の再生産からみれば、貨幣資本に外ならないこと。⁽⁴⁾

3、従って、商業資本 $G-W-G'$ は商品資本の機能 $W-G'$ が「一般的に一特殊の資本の特殊の機能として自立化

され、分業によって一特殊の資本家部類に割り当てられた一機能として固定化⁽³⁾したものに外ならないとされている。そして、このことが認められれば、商業資本実存の条件は商品流通であると、次のように第二十章「商品資本に関する歴史的考察」において述べている。

「商業資本は流通面に押しこめられており、その機能はもっぱら商品交換の媒介にあるから、この資本の実存のためには——直接的な交換取引から生ずる未発展な形態を度外視する——単純な商品Ⅱおよび貨幣流通に必要な諸条件以外には何らの条件も必要でない。むしろ、単純な商品Ⅱおよび貨幣流通が商業資本の実存条件である。」

そこで以下、商業資本実存条件としての商品流通をその形式において考察し、そして如何なる意味で商業資本が商品流通を実存条件とするのかという問題を考えてみたい。

〔一〕 単純な商品流通形式について

(a) 問題 限定

ここで、単純な商品流通を全面的にとりあつかうのではない。単純な商品流通形式を考察するのに、必要な限りで問題とする。何故に、商品流通形式にのみに着目するのかの理由については、(E)の(4)において述べる。

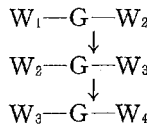
単純な商品流通の分析は『資本論』第一巻、第一篇「商品と貨幣」第三章「貨幣又は商品流通」第二節(a)「商品の姿態変換」においてなされている。この位置での商品流通の分析が単純な商品流通の分析であることは、後に考察する『資本論』初版終末の一文が明確に指摘しているが故に自明である。「経済学批判」においては第三章の標題が「批判」においては第二章——「貨幣あるいは単純な流通」Das Geld oder die einfache Zirkulation とわれている。現行版、第三章、第二節(a)の終末においても次のように明記している。

「商業資本実存条件としての商品流通(市場)について」(1)(谷川)

「この可能性（—恐慌の可能性—谷川）の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだ全く実在しないところの、諸関係の—全範圍を要求する。」⁽⁷⁾と。

(b) 通説による「単純な商品流通形式」について。

通説によれば、第一巻、第一篇、第三章、第二篇(a)「商品の姿態変換」における商品流通は、貨幣が主体として把握され、貨幣が出発点となつて商品流通形式 $W-G-W$ が解かれる。つまり、商品流通たる $W-G-W$ の連鎖は次のように表わされる。⁽⁸⁾



註、 W_1, W_2, W_3, \dots の 1 2 3 は商品としての使用価値の種類を表わす。矢印は貨幣の流通の方向を示す。

つまり、 W_1-G-W_2 の第二の姿態変換たる $G-W_3$ 購買、貨幣の商品への転化たることから出発する。もともと、かくの如く貨幣を主体として把握し、商品流通を説明するのは根拠なきことではない。

まず、第一篇、第三章は「貨幣あるいは商品流通」と題されている。第三章、総体を見れば明らかに貨幣の機能から生ずる貨幣形態の分析が主題である。

第二に、 $W-G-W$ の連鎖について、第三篇(b)「貨幣の流通」において次のような一文がある。

「もし同じ諸商品がすでに吾々のなじみの姿態変換系列たる、一クォーターの小麦——二ポンド——二十エルの亜麻布——二ポンド——一冊のバイブル——二ポンド——四ガロンの火酒の諸環をなすならば、二ポンドは、種々の商品の価値を順次にかくしてつまり八ポンドという価格総額を実現させることによって、これらの商品を順次に流通

させ、最後に酒造家の手に休息するのである」^{α, β)}

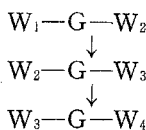
今、一クォーターの小麦——二ポンド——二十エルレの亜麻布——二ポンド——一冊のバイブル——二ポンド——四ガロンの火酒という系列を前提としてこれを $W-G-W$ のからみあいに変元すれば次のようになる。

一クォーターの小麦——二ポンド——二十エルレの亜麻布

二十エルレの亜麻布——二ポンド——一冊のバイブル

一冊のバイブル——二ポンド——四ガロンの火酒

つまり、
という形式になる。



この形式を第三章第二節「(a)商品の姿態変換」における $W-G-W$ と較べてみれば、(a)においては、二十エルレの亜麻布——二ポンド——一冊のバイブルの形式から分析を始めている。他方、(b)においては、一クォーターの小麦——二ポンド——二十エルレの亜麻布の形式から出発している。従って、(b)における商品流通形式 $W-G-W$ の連鎖を無条件に(a)に還元しえない。つまり、(b)においては商品の姿態変換のからみあいが、貨幣の流通からみられている。従って、(a)「商品の姿態変換」において分析された $W-G-W$ の連鎖たる商品流通が前提となって始めて、(b)において問題とされる $W-G-W \dots$ という連鎖の系列が引き出されている。それ故に、貨幣の流通の前提としての商品の姿態変換の分析が必要である。そして、如何なる商品流通が前提となつて、かかる貨幣の流通が引き出されているかを見直さねばならぬ。

「商業資本実存条件としての商品流通(市場)について」(1)(谷川)

所で、第二節(a)「商品の姿態変換」は商品の交換過程として把握されている。

「諸商品はさしあたり、鍍金もされず、砂糖づけもされず、そのあたりのままの姿で交換過程に入りこむ。」⁽¹⁰⁾

然し、この場合、若干注意せねばならぬ点がある。というのは商品が市場へ交換に出されるということと、かかる交換に出されている商品が現実に関連する交換過程とを峻別せねばならぬという点である。何故なら、貨幣を主体として把握して商品流通を分析する前提には交換において生産物が商品になるという命題が存在するからである。しかもかく主張される場合の交換の意味は、商品の現実的連関たる交換過程をも含め、更にはかかる交換過程において始めて生産物は商品になると主張される。この点について、安部隆一教授が『「価値論」研究』第一論文、商品について、五、商品としての使用価値、B「他人のための使用価値——交換」において詳細に検討しておられる。参照されたい。ここでは、この小論に必要な限り同論文に依拠して論点のみ述べておく。

なるほど、商品は交換されなければ商品でなくなる。またその使用価値は使用価値でなくなる。商品にとっては交換は不可欠である。然しながら、交換において生産物が商品になるというとき注意せねばならぬ点がある。それは、いま生産物、使用価値が商品として市場にあることと、それが現実に関換されることを区別しなければならぬことである。ところで生産物、使用価値が商品として市場にあり商品となるのは、それが二重の社会的性格をもつ私的労働の生産物としてに他ならない。「諸使用対象が商品となるのは総じて、それが相互に独立して営まれる私的諸労働の生産物であるからに他ならない。」もっとも、私的労働が事実に、二重の社会的性格を獲得するためには、商品生産が営まれるにいたっていなければならない。しかし、総じて、生産物、使用価値が商品となり、いま市場にあるのは、私的労働の二重性格による。なるほど商品生産の行なわれないときには、生産物、使用価値は単なる労働生産物に過ぎない。しかしそれが市場に出れば、これを生産した労働は「交換の内部において」「私的諸労働の二重の社会

的性格」をおびる。従って、生産物、使用価値はすでに商品として市場にある。それ故に、それは現実に交換されねばならぬ。いつまでも交換されないならば、それは商品でもなくまた使用価値でもなくなる。かくて、現実の交換は商品にとって不可決である。

さて、現実の交換は如何なる意味で、商品にとり必然的な不可避的な条件であろうか。

生産物、使用価値が商品となるのは、総じてそれが二重の社会的労働をもつ私的諸労働の生産物であるからであり、かくて、生産物、使用価値が商品として市場にあるということにすでに含まれているところの「私的諸労働の二重の社会的性格」が現実の「交換の内部において初めて現象」し、また現実の交換によって、私的諸労働が「実際はじめて、社会的総労働の諸環たる実を示す。」現実の交換が「私的諸労働の二重の社会的性格」を初めて与えるのではない。生産物、使用価値が市場にあるということのうちにすでに含まれているところの性格を「初めて現象」せしめ、「その実を示す」にすぎない。それはすでに潜勢的にあるものを顕勢的にするにすぎない。——以上、『価値論』研究」32〜37頁による。——

かかる把握に立つて、第二節(a)「商品の姿態変換」の第一篇における位置について若干みてみる。

第二節(a)「商品の姿態変換」は次の二点を前提としていることを「経済学批判」は指摘している。まず「すでに見た如く、商品の世界とそれと共に事実上発達した分業が前提される場合のみ、商品はより展開された交換過程であると同様に、流通は全面的な交換行為とその更新の不断の流れとを前提とする。

第二の前提は諸商品は価格で規定された商品として交換過程に入りこむ、あるいは、交換過程の内部で相互に二重実存として——現実的には使用価値として、観念的には価格において交換価値として——現われるということである。」すなわち、まず社会的質料変換の媒介をなす商品の姿態変換は再生産過程として前提されている。この点について

「商業資本実存条件としての商品流通(市場)について」(1)(谷川)

は後に(6)の(3)にて述べる。

第二に交換過程の内部において現われる諸商品の二重実存 Doppelexistenz が前提となる。

すなわち「商品が価格附与の過程において商品の流通可能な形態を受けとり、そして金が貨幣性格を受けとった後に、商品の交換過程を含む矛盾を流通は同時に表示し、かつ解決するであろう。」と。

かくて、第三章、第二節「流通手段」の位置においては、第三章、第一節「価値の尺度」における市場に定在し、まだ商品の現実の交換たる交換過程に入らぬ商品の実存形態が前提となっている。「経済学批判」はその第二章〔現行版第三章〕「貨幣又は単純な商品流通」第一節「価値の尺度」の始めに明確に断っている。

「流通の第一の過程は、現実的流通にとってのいわば現論的な準備過程である。」これに対して、「経済学批判」の第二章〔現行版第三章第二節「流通手段」〕においては、「諸商品の現実的な交換、すなわち社会的な質料変換は、使用価値および交換価値としての形態変換が同時に貨幣の一定の諸形態に結晶するところの、ひとつの形態変換においておこなわれる。この形態変換のをべることは、流通をのべることである。」⁽⁸⁾ 以下 Der wirkliche Austausch der Ware=der gesellschaftliche Stoffwechsel となっている。従って、第三章、第一節「価値の尺度」と第二節「流通手段」との位置の關係は、第一篇「商品と貨幣」総体からみれば、第一篇、第一章「商品」と第二章「交換過程」との位置の關係に照応するといえる。すなわち、周知の如く、第一章と第二章との關係については、『資本論』初版において——現行版第一章末尾にあたる位置——述べている。

「商品は、使用価値と交換価値との、かくして二つの対立物の、直接的な統一である。だからそれは一個の直接的な矛盾である。商品がこれまでのように分析的に、あるときは使用価値の観点の下で、またあるときは交換価値の観点の下で、考察されるのではなくて、一全体として現実に他の諸商品に関連させられるや否や、かかる矛盾はみづか

らを展開せねばならぬ。ところが、諸商品の相互の現実的な関連は、それらの交換過程である。」

かくて、第三章「貨幣あるいは商品流通」は、その主題が貨幣の機能形態の分析であるとはいえ、それでもってただちに、貨幣を主体としているとはいえぬ。すなわち、第一篇「商品と貨幣」総体からみれば、第一篇は「商品の分析」から出発し、商品が主体として把握されている。第三章においても、貨幣の機能を規定するのは商品であり、商品流通である。従って、第三章、第二節(a)「商品の姿態変換」における商品流通の分析は貨幣を主体として把握されるのではなくて、商品を主体として把握して $W_1 | G | W_2$ の第一段階 $W_1 | G$ から分析を始めねばならぬ。

(c) 単純な商品生産と流通形式について

さて、第三章、第二節(a)「商品の姿態変換」の考察に入るのであるが、ここでは、それを全面的にとりあつかうのではない。

「それぞれの商品の姿態変換系列がえがく循環は、他の諸商品の諸循環と、解けないように絡みあっている。その総過程は商品流通としてあらわれる。」

ここでは、かかるからみあいが如何になされているかということのみを形式に着目して考察する。

「商品の交換過程は、つぎのような形態変換において逐行される。

商品—貨幣—商品

$W | G | W$

まず、 $W | G | W$ を商品生産者の立場から、個別的過程として見る。

商品に内在するところの使用価値と価値とは、商品の現実的連関たる交換過程において商品生産者に次のように映る。すなわち、商品としての使用価値は他人のための使用価値として、商品価値は、例えば二ポンドという表象され

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1) (谷川)

た金量たる価格において彼の目に映る。⁶³⁾

「彼の商品たる二十エルの亜麻布は価格が規定されている。その価格は二ポンドである。彼はそれを二ポンドと交換し、そして善良な男として、その二ポンドをふたたび同じ価格の家族用バイブルと交換する。彼にとっては価値の担い手たる商品にすぎぬ亜麻布が、その価値姿態たる金と引換えに譲渡され、そして、この姿態から再び他の商品、すなわち、使用対象として織物業者の家にはいり、そこで信用鼓吹の慾望を充たすはづの、バイブルと引換えに譲渡される。かくして、商品の交換過程は、相対立し相互に補足しあう二つの姿態変換……によって成就される。」

もともと、「単純な商品流通——購買のための販売——は、諸使用価値の取得、諸慾望の充足という、流通の外部に横たわる窮極目的のための手段に役立つ。」⁶⁴⁾

従つて、「彼の立場からすれば、全過程は、彼の労働生産物との交換を、諸生産物の交換を、媒介するにすぎない。」⁶⁵⁾

然しながら、 $W-G-W$ を社会的な立場からみれば異なる。

「商品の価格の実現、あるいは、商品のただ観念的な価値姿態の実現は、同時に、逆に、貨幣のただ観念的な使用価値の実現であり、商品の貨幣への転形は、同時に、貨幣の商品への転形である。一個の過程が、二面的な過程——商品所有者の極からは販売、貨幣所有者の反対極からは購買——である。あるいは、販売は購買であり、 $W-G$ は同時に $G-W$ である。」⁶⁶⁾

W_1-G は、同時に $G-W_1$ である。然し、ここで看過し得ない点がある。 W_1-G-W_2 (亜麻布——貨幣——バイブル) の第一段階、 W_1-G (亜麻布——貨幣) が遂行されるためには、 W_3-G-W_1 (小麦——貨幣——亜麻布) における W_3 (小麦) が商品として市場に出され、かつ、その第一段階 W_3-G が終了していなければならぬということである。

すなわち、 W_1 （亜麻布）生産者としては、 W_1 （亜麻布）を購買する貨幣がいかなる商品の転化形態であるかは問題ではない。

然し、社会的に見れば、金生産者の場合は別として、まず、 W_1 以外の商品が生産され、かつそれが貨幣に転形され

いなければならぬ。従って、 $W_1 - G - W_2$ の第一段階は、上のように、 $W_3 - G - W_1$ の

第二段階とからみあう。①

さて、 $W_1 - G - W_2$ （亜麻布—貨幣—バイブル）の第二の姿態変換、 $G - W_2$ （バイブ

ル）が逐行されるためには、 W_2 （バイブル）が生産され、市場において商品として出

ていなければならぬ。他方、 W_2 （バイブル）が生産者にとっては、 $W_2 - G - W_4$ （バイ

ブル—貨幣—火酒）の第一段階 $W_2 - G$ である。従って、 $W_1 - G - W_2$ の第二段階 $G - W_2$

は、 $W_2 - G - W_4$ の第一段階 $W_2 - G$ とからみあう。すなわち、②の形式をとる。

$$\textcircled{1} \quad \begin{array}{c} W_1 - G - W_2 \\ W_3 - G - W_1 \end{array}$$

亜麻布—貨幣—バイブル
小 麦—貨幣—亜麻布

$$\textcircled{2} \quad \begin{array}{c} W_1 - G - W_2 \\ W_2 - G - W_4 \end{array}$$

亜麻布—貨幣—バイブル
バイブル—貨幣—火酒

$$\textcircled{3} \quad \begin{array}{c} W_1 - G - W_2 \\ W_3 - G - W_1 \\ W_2 - G - W_4 \end{array}$$

亜麻布—貨幣—バイブル
小 麦—貨幣—亜麻布
イブル—貨幣—火酒

さて、一商品、 W_1 （亜麻布）の $W_1 - G$ 、 $G - W_2$ 、とい

う第一、第二の姿態変換を、 $W_1 - G - W_2$ （亜麻布—貨幣

バイブル）という総姿態変換として見、更に、全過程を

社会的に見れば、この姿態変換は、上のように他の商品

の姿態変換とからみあっている。③

所で、 $W_1 - G - W_2$ の第一段階 $W_1 - G$ が逐行されるた

めには、 $W_3 - G - W_1$ の第一段階 $W_3 - G$ が逐行されてい

ることを前提としていた。従って、 $W_3 - G - W_1$ の第一段階 $W_3 - G$ には、 $W_2 - G - W_3$ の第二段階がからみあわねばな

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

らぬ。又、 $W_1 | G | W_2$ の第二段階 $G | W_2$ には、 $W_2 | G | W_4$ の第一段階 $W_2 | G$ がからみあう。他方、 $W_2 | G | W_4$ がその第二段階を逐行するには、 W_4 が生産され、市場に出されていなければならぬ。かくて、各商品の總体的姿態変換とその循環のからみあひは、社会的な過程である。今、これを総過程として見れば、次のような形式をとる。

$$\begin{array}{l} W_1 - G - W_2 \\ W_3 - G - W_1 \\ W_2 - G - W_4 \\ W_5 - G - W_3 \\ W_4 - G - W_6 \\ W_7 - G - W_5 \\ \dots\dots\dots \\ \dots\dots\dots \end{array}$$

註 この形式の左側の列は、各商品の生産を表わす。右側の列は、各商品の消費を表わす。

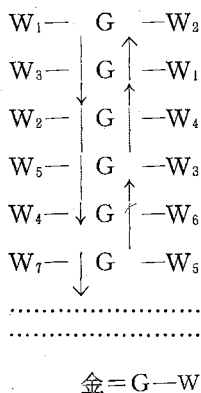
「一つの商品の循環を形成する二つの姿態変換は、同時に、他の二つの商品の逆な部分的姿態変換を形成する。同じ商品（亜麻布）が、それ自身の姿態変換の系列を開始し、そして他の一商品（小麦）の總体的姿態変換を完結させる。その商品は、その第一の転形たる販売中に、身一つでこの二役を演ずる。これに反し、その商品は、それが宿命的に自らを転形してゆく金の踊としては、同時に、ある第三の商品の第一の姿態変換を終結させる。かくして、それぞれの商品の姿態変換系列がえがく循環は、他の諸商品の諸循環と、解けないように絡みあっている。その総過程は商品流通として現われる。」

かくて、我々が析出した上述の形式は、商品流通を表わす。更に、かかる形式を析出するにあたり、何時も、次の点を前提とした。

「Bの商品がAの商品にとって代るのだが、しかし、AとBとは彼等の商品を相互に交換するのではない。なるほど、AとBとが相互に相手から買うこともありうるが、かかる特殊な連関は、けっして、商品流通の一般的諸關係

によって条件づけられていない。……。織物業者が亜麻布を売ることができるのは、農民が小麦をすでに売っているからに他ならず、火酒愛好者がバイブルを売ることができるのは、織物業者が亜麻布をすでに売っているからに他ならず、酒造業者が蒸留した水（火酒）を売ることができるのは、他の人が永遠の命の水（バイブル）をすでに売っているからに他ならないという次第である。」

然し、「貨幣として機能するためには、金はもちろん、どこかの地点で商品市場に入らねばならぬ。この地点は金の産源地にあるのであって、そこではそれは、直接的な労働生産物として、同じ価値をもって他の労働生産物と交換される。だが、この瞬間から、金はいつでも実現された商品価格をあらわす。」かかる前提になつて、上述の形式において、貨幣の流通をみれば次のようになる。



註 矢印は貨幣が流通する方向を示す。

まさに、商品流通は「たえず貨幣を発汗する。」⁸⁴⁾

(d) 通説における商品流通形式の検討

さて、この形式における各商品の総体的姿態変換 $W \mid G \mid W$ をみてみるに、各商品の $W \mid G \mid W$ は商品から出発し、商品に帰着している。それ故、「それにおいて労働生産物の質料変換が行なわれる形態変換たる $W \mid G \mid W$ は

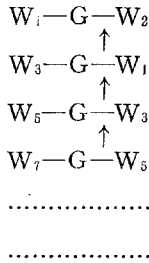
「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

同じ価値が商品として、過程の出発点をなし商品として、同じ点に復帰することを、条件づけている。だから、諸商品のこの運動は循環である。他方において、この同じ運動形態は、貨幣の循環を排除する。この運動形態の結果として、貨幣は出発点から絶えず遠ざかり、そこには復帰しない。」

「だから、商品流通によって貨幣に直接に与えられる運動形態は、貨幣がたえず出発点から遠ざかること、貨幣がある商品所有者の手から他の商品所有者の手に渡ること、すなわち貨幣の通流である。」

さて、かかる商品流通における貨幣を主体として把握して商品流通をみれば、商品が貨幣を通流せしめるのではなくて、逆に、貨幣が商品を通流せしめるという反対の仮象を生み出す。

まず、 $W_1 - G - W_2$ の第一の姿態変換 $W_1 - G$ を出発点としての貨幣の通流の系列を引き出せば次のようになる。



すなわち、 $W_1 - G$ が逐行されるためには、 W_3 が生産されて市場に出され、かつ、 $W_3 - G - W_1$ の $W_3 - G$ が逐行されてしまっていなければならぬ。 $G - W_3$ 、 $G - W_5$ 、等々についても同様に、 $W_5 - G$ 、 $W_7 - G$ が逐行されていることを前提とする。ところで、 W_1 生産者の立場からのみ、現象するまに見れば、彼の W_1 としての使用価値は販売によって消費面に脱落する。そして、その代りに W_3 生産者が所有していた G を手に入れる。従って、彼の目には、商品流通においては、商品はたえず販売者の手にあるとはいえ、つねに消費面に脱落し、貨幣はつねに市場にあると見える。従って、彼が購買者の立場に立てば、貨幣が商品を実現し貨幣が商品を通流せしめるというように見える。

すなわち、 $W_7 - G - W_5$ の $G - W_5$ が W_5 を実現し、 $G - W_1$ が $W_1 - G$ を実現すると。しかし、彼が販売者の立場からみれば、商品が貨幣を引きつけ、かくて商品が貨幣を運動せしめるとも見える。すなわち「商品の第一の姿態変換は、貨幣の運動としてばかりでなく、商品自身の運動としても見えうる。」

さて、次に $W_1 - G - W_2$ における第二の姿態変換 $G - W_2$ を出発点として、貨幣通流の系列を引き出せば次のようになる。

すなわち、 $W_1 - G - W_2$ の $G - W_2$ が逐行されるためには、まず W_2 が市場に出ていなければならぬ。更に、 $W_1 - G$ の $G - W_2$ は、 $W_2 - G - W_4$ の第一段階でもある。 $W_2 - G - W_4$ においても同様のことがいえる。

さて、 $W_1 - G - W_2$ の $W_1 - G$ を出発点として引き出された前述の貨幣通流と、 $G - W_2$ の貨幣通流との系列の関係を見てみる。すれば、 $W_1 - G - W_2$ は、 W_1 と W_2 との交換を意味する。然るに、 W_1 と W_2 との交換は直接に交換されるのではなくて、 W_1 はまず、 $W_3 - G - W_1$ の第二段階と関連して、 W_1 を等価形態に転化する。つまり、 $W_1 - G - W_2$ の第一段階 $W_1 - G$ は W_3 と W_1 との交換と社会的に連関していることを意味する。更に、 $W_1 - G - W_2$ の $G - W_2$ は、 $W_2 - G - W_4$ の第一段階と連関する。 $W_2 - G - W_4$ は、 W_2 と W_4 との交換である。従って、 $W_1 - G - W_2$ の第二段階は、 $W_2 - G - W_4$ という W_2 と W_4 との交換の第一段階と連関する。かくの如く、 $W_1 - G - W_2$ という W_1 と W_2 の交換は、

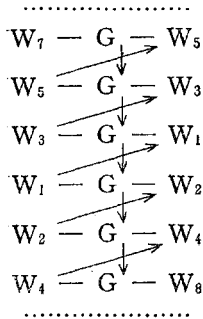
「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

上述の $W_1 - G$ の系列にて示される交換系列と、 $G - W_2$ にて示される交換の系列と社会的に関連していることを示す。然るに、 $W_1 - G - W_2$ の $G - W_2$ を出発点として引き出された系列を購買者の立場から現象するまゝにみてみる。すれば、貨幣はつねに購買者の手にある。そして、市場にある商品としての使用価値は、購買によって市場から消費部面に脱落する。他方、貨幣はつねにその商品にとって代る。したがって、運動の連続性はつねに貨幣の側にあると見える。

更に、商品としての使用価値は、市場に出されたとき、その所有者にとっては非使用価値であり、その購買者にとっては使用価値であるというように見える。

それ故に、「商品流通の結果たる他の商品によつての商品の填補」は次のように見える。すなわち「商品自身の形態変換によつて媒介されるのではなく、流通手段としての貨幣の機能によつて媒介されるのであり、流通手段としての貨幣が、それ自身では運動しない諸商品を流通させるのであり、諸商品をば、そこではそれらが非使用価値である人の手からそこではそれらが使用価値である人の手に——つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に——移すのだ、というように見える。」

これを形式で示せば次のようになる。



すなわち、 G は順次、 $W_5, W_3, W_1, W_2, W_4, \dots$ を実現せしめる。 G が W を運動せしめる。他方、 $W_5, W_3, W_1, W_2, W_4, \dots$ の使用価値は矢印の方向で消費部面に入り、かくて市場より脱落する。それ故に、商品流通の連続性は G の側にある。すなわち、「貨幣はたえず、流通する諸商品にとつてかわり、かくしてそれ自身の出発点から遠ざかることにより、諸商品を

たえず流通部面から遠ざける。それ故に、貨幣運動は商品流通の表現に他ならぬとはいえ、その逆に、商品流通は貨幣運動の結果に他ならぬように見える。⁽⁴⁰⁾」

ところで、通説における商品流通の形式は、まさにこの形式である。従って、通説は商品流通を①個別的生産者の立場からのみ、②しかも貨幣を主体として、購買者の立場から、③商品流通が生み出す仮象をそのまま形式化したものといえる。

かくいえば、次の反論が考えられる。すなわち次の一文を如何に解するかと。

「もしこの同じ諸商品が、 $(-W_3, W_1, W_2, W_4)$ 谷川」すでに吾々なじみの姿態変換系列たる、一クォーターの小麦——二ポンド——二十エルの亜麻布——二ポンド——一冊のバイブル——二ポンド——四ガロンの火酒の諸環をなすならば、二ポンドは、種々の商品の価格を順次に、かくしてつまり八ポンドという価格総額を、実現させることによって、これらの商品を順次に流通させ、最後に酒造家の手に休息するのである。それは四回の流通を遂行する。」⁽⁴¹⁾
もし、 W_3, W_1, W_2, W_4 、という諸商品の姿態変換とその循環が、それぞれからみ合わないで、他の諸商品の循環とからみあっているとすれば、各商品の価格がいづれも二ポンドであるから、実現されるべき価格総額八ポンドに相当する貨幣分量が必要である。

所で、我々が析出した商品流通形式の如くこれら諸商品がからみあっているとすれば、二ポンドが四回の流通をなすといわれている。そして、姿態変換系列を、 $W_3 - G - W_1 - G - W_2 - G - W_4$ と表わされている。

すれば、この系列は一体何を意味するのかということである。すなわち、この系列が、「同じ貨幣片のこの反復的な位置変換は、商品の二重の形態変換——二つの対立的な流通段階を通しての商品の運動——を表示し、種々の商品の姿態変換の絡みあいを表示する。」⁽⁴²⁾とすらいつているではないかと。

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

える。

(E) 総括

我々は、通説の商品流通形式が(a)「商品の姿態変換」を前提として引き出されているように見えるが、もし、かかる形式を引き出すとすれば(b)「貨幣の流通」における連鎖を前提としなければならぬ点を見た。更に、通説の形式を引き出すには次の命題が前提となっていることを見た。すなわち、生産物が商品となるのは交換において、又は、更に進んで、商品の現実的連関たる交換過程において商品になるという命題である。

我々は、労働生産物がまず商品として市場に出されることと、その商品の現実的連関たる交換過程とを峻別した。そして、労働生産物が商品となるのは「商品で表示される労働の二重性格」Ⅱ「私的労働の二重の社会的性格」によると主張した。

かかる命題にしたがって、「商品の姿態変換」を形式のみに着目して考察し、商品流通形式を引き出した。そして、結局、通説の形式は $G-W$ という購買者の立場から、商品流通において現象するままの関連を一面的に引き出している点をつきとめた。更に、(b)「貨幣の流通」における連鎖の意味を、(a)における商品流通を前提として、商品が貨幣を流通せしめていることを表わしているとした。従って、通説の商品流通形式は形式に着目しても、(a)「商品の姿態変換」(b)「貨幣の流通」いづれにも妥当せぬことを見た。

かかる通説の誤りの根拠は、結局、労働生産物、使用価値は交換において商品となる、更に進んで、商品の現実的連関たる交換過程において商品となるという命題にその根拠をもつ。

勿論、かかる形式における検討のみでは充分ではない。この稿においては通説の商品流通形式について、ただ形式に着目してそれが持つ問題点を指摘したにすぎない。

さて、我々の如く、商品流通形式を析出すれば、積極的に如何なる点が主張しうるかという事が生ずる。勿論、ここでは、第二巻の出発点としての商品の流通形式を明らかにする限りである。

まず、

$W_1 - G - W_2$
 $W_3 - G - W_1$
 $W_2 - G - W_4$
 $W_5 - G - W_3$

という形式における、 W_1 、 W_3 、 W_2 ...という商品は剰余価値を含みぬ単純な商品である。更に、 W_1 、 W_3 、 W_2 ...という商品は、「相互に独立して営まれる」商品生産者の個々々の商品である。かかる個々の商品は、特定の生産部門を形式する商品の一可除分をなす。従つて、個々の商品が同時にそれ自身一特殊の商品である。それ故、かかる一特定種類の定型を前提としている。「個々の商品は、この場合には、総じて、その商品種類の平均見本として意義を持つ。」さて、かかる個々の、一特殊の商品が描く $W_1 - G - W_2$ は、個別的過程としてみれば、 W_1 と W_2 との交換であり、 W_1 は W_2 という商品にて填補される。然し、すでに見た如く、かかる個別的な、特定の $W_1 - G$ 、 $G - W_2$ という過程そのものは同時に社会的である。すなわち、 $W_1 - G - W_2$ の $W_1 - G$ は、社会的には、 $W_3 - G - W_1$ の第二段階 $G - W_1$ と、 $G - W_2$ は、 $W_2 - G - W_4$ の第一段階 $W_2 - G$ とからみあう。個別的なものが $W_1 - G$ によつて社会的となるのではない。個別的な過程たる $W_1 - G - W_2$ そのものが同時に社会的な過程である。かくて、単純な商品流通形式 $W - G - W$ は、個別的、特殊な過程を表示するのみならず、商品流通たる社会的過程をも表示しているといえる。

(2) 単純な商品流通における社会的分業。

W_1 、 W_3 、 W_2 、 W_5 ...という個々の商品は特定の生産部門を代表する一特定種類の定型をもつ商品である。すれば「相

互に独立して営まれる私的諸労働」Ⅱ「商品で表示される労働」は、自然発生的な社会的分業の一環をなしている。

「相互に独立して営まれる私的諸労働」は二重の社会的性格をもつ。今、社会的分業が問題であるのだから、何よりもまず、商品としての使用価値——具体的有用的労働の系列で問題となっている。

さて、例えば、亜麻布生産者が亜麻布生産者として亜麻布のみを面的に生産するということは、同時に他の商品たる小麦、バイブル、火酒、等々、 W_1 、 W_2 、 W_3 、 W_4 、…という商品を生産しないということの意味する。つまり彼の「商品で表示される労働」は一面的に狭搾されている。このことは、どの商品を生産する労働にも当てはまる。従って、今、総体としてみれば次のことを意味する。「商品界には発達した分業が前提されている。あるいはむしろ発達した分業は、特殊な諸商品として相互に対立するところの、もろもろの使用価値の多様性のうちに、直接にみづからを表わしている。すべての特殊な、生産的な、仕事様式の総体としての分業は、質料的方面から、使用価値を生産する労働として、観察された社会的労働の総姿容である。⁹⁴⁾」

ところで、「社会的分業は商品生産の実存条件であるが、しかし、逆に、商品生産は社会的分業の実存条件ではない。⁹⁵⁾」

従って、「かかるものとしての分業は、商品の見地からみれば、かつ交換過程の内部では、ただその結果のうちのみ、商品そのものの特殊化のうちにのみ実存する。⁹⁶⁾」かくて、商品流通は、それにおける各商品の諸循環のからみあいにおいて、社会的分業を表示し、したがって、「社会的労働の総姿態」を示す。

(3) 労働力の再生産

所で、亜麻布生産者が亜麻布のみを生産するということは、他の W_2 、 W_3 、 W_4 、…という商品が生産されているということを前提としている。このことは、次のことを意味する。すなわち、 $W—G—W$ における $W—G$ と $G—W$ に

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

ついで次のことがいえる。

「商品生産者は一面的な生産物のみを提供するので、彼はしばしばそれを比較的多量に販売するのであるが、他方では、彼は、その多面的な慾望に余儀なくされて、実現された価格または受けとった貨幣額を、たえず多数の購買に分裂させる。だから、一つの販売が、相異なる諸商品の多くの購買にそそぎ入る。かくして、一つの商品の最後の姿態変換は、他の諸商品の諸々の姿態変換の総和を形成する。」

商品流通 $W - G - W$ において、左側の列は商品の生産を表示する。すなわち、「社会的労働の総姿態」を示す。右側の列は商品の消費を示す。これも又、左側の列の総商品を前提とし、かつこれら総商品の消費を示す。

単純な商品においては、剰余価値は含まれぬ。しかも、さしあたり、単純な商品生産においてはC部分に相当する部分はゼロとされている。すれば、総商品の大部分は個人的消費に入る。このことは次のことを意味する。すなわち年々の再生産において、左側の列の総商品を生産するために労働力が消費 \parallel 実現される。右側の列において総商品が個人的に消費され、かくて、労働力が再生産される。すなわち、 $W - G - W$ の背後には商品の生産と労働力の再生産が前提されていることを意味する。

かくて、商品流通は再生産を表示しているといえる。

(4) 『資本論』第二巻との連けいについての若干の問題点——商品流通形式を問題とする理由——

(4) — (a) 『資本論』第二巻の出発点として商品について。

『資本論』第二巻「資本の流通過程」は第一篇「資本の姿態変換とその循環」第二篇「資本の回転」第三篇「社会的総資本の再生産と流通」からなる。

そして、第一篇は第一章「貨幣資本の循環」第二章「生産資本の循環」第三章「商品資本の循環」第四章「循環過

程の三つの姿」第五章「流通時間」第六章「流通費」よりなる。かくて、第二巻は第一篇、第一章「貨幣資本の循環」の分析から出発する。然しこの場合、次のことが前提となっている。

すなわち、貨幣資本の循環の第一段階 $G \rightarrow W \xrightarrow{P_m} A$ が逐行されるためには、まず商品として購買される $(P_m) W$ 、 A が商品として、本来的商品市場、労働市場において定在していなければならぬということである。

さしあたり、商品としての労働力、 A を別として $(P_m) W$ は如何なる商品であるかが問題となる。

すなわち、自明の如く、第二巻は第一巻の次に位置する。すれば第二巻は第一巻と何を基軸に如何に連けいされているのかという問題が生じる。勿論ここで、かかる問題を主題としてとりあつかうのではないが、必要な限り若干追求しておく。

所で、かかる問題を解く場合、まず『資本論』第一巻が何をもって出発し、かつ帰着しているかを見極めねばならぬ。

この点については、すでに『資本論』第一巻初版終末の一文が問題としている。

「最後に吾々は、蓄積の考察に移るに際して見捨てた線を、なおしばらくとりあげねばならぬ。資本家が五千ポンドを前貸し、生産過程で、生産手段に四千ポンド、労働の搾取度百パーセントで労働力に千ポンドを、消耗したという。生産物、例えばXトンの鉄の価値は、六千ポンドに達する。資本家が鉄をその価値で販売すれば、彼は千ポンドの一の剰余価値、すなわち鉄の価値に物質化された不払労働を、実現する。しかし鉄は販売されねばならぬ。資本制生産の直接的結果は諸商品——たとい剰余価値を孕んでいるにしても——である。吾々はおいて吾々の出発点、すなわち商品に投げかえされ、またそれとともに流通に投げかえられる。しかし吾々が次の巻で考察せねばならぬのは、もはや単純な商品流通ではなく、資本の流通過程である。」

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

この一文について、安部隆一教授は「『価値論』研究」(岩波書店版) 第一論文、商品について、三『資本論』第一巻と商品、B 出发点としての商品と帰着点としての商品、において次のように指摘されている。

「この叙述は、いま当面の問題にとつて(——『資本論』第一巻の出发点としての商品が「資本制的商品」であるか否か——谷川) 重要であるのみならずまた『資本論』第一巻と第二巻とのつながりを解明するものとして重要である。これと同じ趣旨は『学説史』第三巻の上掲箇所(——原文百三十頁、訳、全集第十一卷百三十七頁)に展開されており、また「遺稿」は百六十頁以下に詳細な説明をあたえている。

劈頭の商品、出发点としての商品は疑いもなく、単純な商品である。それは剰余価値を孕んでいない。資本の生産物としての商品は、何よりもこれを孕んでいなければならぬ。また、劈頭の商品は「個々の」*einzelne* 商品である。資本の生産物としての商品は、一生産部門の全生産物を形式する商品量 *Warenmasse* である。この二点において、出发点としての商品は、剰余価値を含むか否かということになる。」と。

もし剰余価値を含むとすれば第二巻は第一巻第七篇「資本の蓄積過程」に連けいする。もし剰余価値を含まぬとすれば第二巻は第一巻第二篇「貨幣の資本への転化」に連けいする。⁶⁸⁾

次に、第二巻の出发点としての商品を第二巻の立場からみてみる。すれば、第二巻第一篇第三章「商品資本の循環」において次の一文がある。

「資本の循環を表わす一般的範式はつぎの如くである。

$W' - G' - W \cdots P \cdots W'$

W は前述の両循環の産物としてばかりでなく前提としても現象する。けだし、生産手段そのものの少くとも一部分が他の循環中個別的資本の商品生産物であるかぎり、一資本にとっての $G - W$ がすでに他資本にとっての $W' - G'$

を含むからである。」

ここにいう兩循環とは、貨幣資本、生産資本の循環を指す。従って、貨幣資本の循環の第一段階をなす $G \rightarrow W$ が前提とする (P_m) W は、他の個別資本の W 、すなわち m を含んだ商品を前提とするとされている。とすれば、当然次の疑問が生じる。何故に第二巻は商品資本の分析から出発せず、貨幣資本の分析から始めたのであるかと。

所で、商品資本の循環 $W' \dots W'$ は W' から出発する。商品資の出発点としての W' については次のようにいわれている。

「形態Ⅲでは出発点 W は同一規模での循環が更新される場合でも W' として表わされねばならぬ。」つまり「資本関係としての W' がここでの出発点である。」と。

すなわち、商品資本の出発点としての W' は W' als Kapitalverhältnis として把握されている。

他方、商品資本は次のようにも把握されている。

「 W としての W' は、一個の産業資本の循環においては、この資本の形態としてではなく、他の一産業資本——生産手段がこの資本の生産物たるかぎりでは——の形態として現われる。第一の資本の $G \rightarrow W$ (すなわち $G \rightarrow P_m$) なる行為は、この第二の資本にとっては $W' \rightarrow G'$ である。」

すなわち、商品資本は W' als W' として把握されている。

かくて、商品資本、Warenkapital は W' als Kapitalverhältnis であり、又、 W' als W' である。

かかる商品資本の二重性について、第二巻、第一篇、第六章、第二節「保管費用」一、「在荷形式一般」においていう。

「生産物は、それが商品資本として定在する間、または市場に滞留する間は、つまりその出てくる生産過程とそ

「商業資本実存条件としての商品流通(市場)について」(1) (谷川)

れの入りこむ消費過程との合間にあるかぎりでは、商品在荷を形成する。市場にあり従って在荷の姿態をとる商品としては、商品資本は各循環において二重に現われる。すなわち一度は、その循環が考察される過程的資本そのものの商品生産物として現われ、もう一度はこれに反し、購買されて生産資本に転形されるために市場になければならぬ他の一資本の商品生産物として現われる。」

従って、貨幣資本の循環の第一段階 $G \rightarrow W (P_a)$ の前提としての本来的商品市場における商品は、商品資本が、 $W' \text{ als } W$ と把握され、前提されているといえる。

すれば、第二巻は何故に商品資本の分析から始めず、貨幣資本の分析から始めるのかという問題は、まず、何故に第二巻は $W' \text{ als Kapitalverhältnis}$ から出発せず $W' \text{ als } W$ から出発するのかという問題に帰着する。この点について必要な限り、後に闡説する。

今、問題たるのは、第二巻の出発点としての商品が剰余価値を含むか否かである。上述により、明らかに、第二巻の出発点としての商品は、第一巻の帰着点としての商品、剰余価値を含んだ商品、であり、第二巻の立場からすれば $W' \text{ als } W$ と把握された商品資本である。

さて、かかる点を一応つきとめておいて、第二巻、第一篇、第一章「貨幣資本の循環」の第一段階 $G \rightarrow W (P_a)$ を見てみる。

「 $G \rightarrow W$ は、ある貨幣額が諸商品のある額に転態されることを表わし、購買者にとっては彼の貨幣の商品への転形であり、販売者にとっては彼等の諸商品の貨幣への転形である。一般的商品流通上のこの事象を、同時に個別的一資本の自立的循環における機能的に規定された一段階たらしめるものは、さしあたり、この事象の形態ではなくて質料的内実であり、貨幣と席をかえる諸商品の独自のな使用上の性格である。」

貨幣額 G は二つの部分に分裂して、その一方は労働力を購買し、他方は生産手段を購買する。この二系列の購買は、ぜんぜん相異なる市場で行なわれる。一方は本来的の商品市場、他方は労働市場で」

すなわち、本来的の商品市場、労働市場における商品の販売、購買は「一般的商品流通上の事象」*Der Vorgang der allgemeinen Warenzirkulation* であるといわれている。

では、 $G - W (P^m_A)$ にて遂行される商品の販売、購買は如何なる意味で *die allgemeine Warenzirkulation* であるのかという問題が生じる。この点について、我々に解明の糸口を与えてくれるのは「遺稿」の最終末の一文である。

「直接の資本主義的生産過程の最も手近な結果、すなわちその生産物は、商品である。……商品としては資本の生産物は、商品の交換に入り込むだけでなく、また同時にわれわれが商品の変態として叙述したかの形態転化を遂げなければならぬ。この転化がたんに形式上の転化——これらの商品の貨幣への転化及び逆に貨幣の商品への転化——にかんするかぎり、この過程はわれわれが『単純な流通』すなわち商品自体の流通と呼んだところのものにおいて、すでに描かれている。」

一般的商品流通 *die allgemeine Warenzirkulation* は形式のみから見れば、*die Warenzirkulation* 商品流通であり従って、*die einfache Warenzirkulation* 単純な商品流通であるとされている。それ故に、我々は、一般的商品流通を問題にする前に、さしあたり、単純な商品流通を、その形式のみに着目して考察したのである。

(4) — (b) 単純な商品流通形式と一般的商品流通形式との関連についての若干の問題

一般的商品流通は形式のみからみれば、商品流通であり、従って、単純な商品流通であるのは、如何なる意味ににおいてかといえるのであろうか。

一般的商品流通を描く商品は、第二巻の出発点としての商品、すなわち、 W als W である。単純な商品流通を描

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1) (谷川)

く商品は第一巻の出発点としての商品である。所で、 $W'als W$ は第一巻においてみれば、第一巻の帰着点としての商品である。

安部隆一教授が鋭く指摘されているように、第一巻の出発点としての商品は、帰着点としての商品とその内容において異なる。とはいえ、出発点 \parallel 帰着点ともに商品であることは変わりはない。そこで、問題は次のようになる。何故に出発点と帰着点との商品はその内容において異なるにも関わらず、両者共に商品であるのか。

もともと、帰着点としての商品は資本制的商品生産の結果である。つまり、「商品生産の資本制的形態」たる資本制的商品生産の結果である。従って、資本制的生産過程には、商品生産一般の規定が貫徹く。すなわち、労働生産物を商品たらしめる「商品で表示される労働の二重性格」 \parallel 「私的諸労働の二重の社会的性格」と社会的分業が貫徹するか否かである。

この点について、安部隆一教授は『価値論』研究「五十四頁において次のように指摘されている。

「私的諸労働の二重の社会的性格は、商品生産一般に貫徹する。それは、単純な商品生産にあっては、相互に独立して営まれる私的諸労働として社会的分業をなす。資本制生産にあっては、労働力そのものが商品となり、それが生産過程において協業せしめられる故に、社会的な労働が生産過程において成立する。しかし、私的所有と社会的分業とは、ここにも貫徹する。」

かくて、第二巻の出発点としての商品、 $W'als W$ は、商品生産一般として把握されている。それ故、これが描く流通は、一般的商品流通となる。この限りで又、単純な商品流通形式が貫徹する。

所で、 $W'als W$ たる商品は剰余価値を含んだ商品、 $W'als Kapitalverhaltnis$ である。かくて、第二巻において、 $W'als W$ が描く一般的商品流通を前提として、如何に、剰余価値を含んだ商品が形式として表現されているかを見

極める必要がある。この点については、次稿、「資本の循環と一般的商品流通」において、検討したい。

附記、この小論は安部隆一教授の御指導、福井孝治教授、古林喜楽教授より載いた助言により、私の研究の一里塚としてまとめた一部である。又、この論文を海道進教授に読んで載いた所、経営学会関西西部会において発表するようにと、おすめ下さったので、次稿の「資本の循環と一般的商品流通」と共に発表した。

註 (1) 「経済学全集」第十一巻、改造社版、二五七—二六二頁。

(2) 私の研究は安部隆一教授著「流通諸費用の経済学的研究」(伊藤書店) から入門し、同教授著「価値論」研究」(岩波書店) を基礎としている。そして、主として『資本論』(第二巻第一篇を中心に) おいて、「流通諸費用の経済学的研究」において前提されている点、すなわち、市場理論の解明に主力を置いている。

(3) Das Kapital Band III. Diez Verlag Berlin 1963. S. 297. 訳、長谷部氏訳、青木書店版、第三部、三八五頁、なお以下、Das Kapital, I, II, III, と略称、訳書も同様に、第一部、第二部、第三部と略称する。

「商品資本の運動は第二部で分析されている。社会の総資本を考察すれば、その一部分は——つねに別の諸要素から構成される、また量的に変動するとは云え——つねに、貨幣に移行するために商品として市場にあり、他の一部分は、商品に移行するために貨幣として市場にある。それはつねに、この移行運動、この形式的姿態変換運動をしている。」

(4) 「利潤論研究」鈴木鴻一郎編、V、商業資本と商業利潤、において、公文道明氏は明確に、社会的総資本の再生産過程を前提として、かかる問題提起を追求しておられる。

- (5) Das Kapital, III, S. 297. 訳、第三部、三八五頁。
- (6) Das Kapital, III, S. 356—7. 訳、第三部、四六一—二頁。
- (7) Das Kapital, I, S. 119. 訳、第一部、一三五頁。
- (8) 宇野弘藏「経済原論」上巻(岩波書店) 五一頁。
- (9) Das Kapital, I, S. 124. 訳、第一部、一四二頁。
- (10) Das Kapital, I, S. 109. 訳、第一部、一二二頁。
- (11) Das Kapital, I, S. 78. 訳、第一部、一七三頁。
- (12) Das Kapital, I, S. 78—79. 訳、第一部、一七三—四頁。

「商業資本実存条件としての商品流通(市場)について」(1) (谷川)

- (13) Das Kapital, I, S. 78—79. 訳 第一部一七三—四頁。
 - (14) Das Kapital, I, S. 78—79. 訳 第一部一七三—四頁。
 - (15) "Zur Kritik der Politischen Ökonomie" Diez Verlag Berlin, 1951. 以下 "Kritik" と略称す。
 - (16) 訳書「宮川実氏訳」「経済学批判」(青木文庫版) 一一二頁、以下、宮川氏訳、と略称す。
 - (17) 「Kritik」S. 87. 宮川氏訳一一二頁。
 - (18) Ebenda, S. 62. 宮川氏訳八〇頁。
 - (19) Ebenda, S. 87. 宮川氏訳一一二—一二二頁。
 - (20) 拙著「経済学雑誌」第五〇巻、第六号「有甲的效果についての一考察」八一頁参照。
 - (21) Das Kapital, I. Hamburg: Verlag Von Otto Meissner. 1867. S. 44.
 - (22) 長谷部氏訳「資本論」初版、岩波文庫版一一二—一二二頁。
 - (23) Das Kapital, I, S. 117. 訳、第一部三三二頁。
 - (24) Ebenda, S. 111. 同訳書 一一二二頁。
 - (25) 「価値論」研究「安部隆一(岩波書店)三二頁、B『他人のための使用価値』—交換、を参照。
 - (26) Das Kapital, I, S. 110. 訳、第一部三三二頁。
 - (27) Ebenda, S. 159. 同訳書 二九二頁。
 - (28) Ebenda, S. 110. 同訳書 一一二二頁。
 - (29) Ebenda, S. 113. 同訳書 一二六—一七頁。
 - (30) Ebenda, S. 114. 同訳書 一二八頁。
- 「商品」は、その価値姿態においては、その自然発生的な使用価値の、およびその商品の生みの母たる特殊の有効的労働の、あらゆる痕跡を脱却して、無差別な人間的労働の一樣な社会的物質化に歸化している。だからひととは、貨幣を見ても、その貨幣形態においては、まさに他の商品と同じに見える。だから塵芥は貨幣ではないが、貨幣は塵芥であるかもしれない。」
- Das Kapital, I, S. 11—5. 訳、第一部三二八頁。「亜麻布の販売たるW—Gは、同時にその購買たるG—Wである。だが、亜麻布の販売としては、この過程は、その対立者たるバイブルの購買をもって、終結する一運動を開始させる。W—G(亜麻布—貨幣)、すなわち、W—G—W(亜麻布—貨幣—バイブル)のこの最初の段階は、同時に、G—W(貨幣—亜麻布)

であり、W—G—W（小麦—貨幣—亜麻布）というもう一つの運動の最後の段階である。一商品の第一の姿態交換、一商品の商品形態から貨幣への転形は、つねに、同時に、他の一商品の、第二の対立的な姿態交換であり、この商品の、貨幣形態から商品への再転形である。」

(30) Das Kapital, I, S. 115. 訳、第一部二二九—二三〇頁。

「G—Wすなわち購買は、同時に販売すなわちW—Gである。かくして、一商品の最後の姿態交換は、同時に、他の一商品の最初の姿態交換である。わが亜麻織物業者にとっては、彼の商品の生涯は、彼が二ポンドを再転形したバイブルをもって終結する。ところでバイブル販売者は、亜麻織物業者から受取った二ポンドを火酒に転換する。W—G—W（亜麻布—貨幣—バイブル）の最後の段階たるG—Wは、同時に、W—G—W（バイブル—貨幣—火酒）の最初の段階たるW—Gである。」

(31) Das Kapital, I, S. 117. 訳、第一部、二三二—二三頁。

(32) Ebenda. 同4。

(33) Das Kapital, I, S. 114. 訳、第一部、一二七頁。

(34) Das Kapital, I, S. 118. 訳、第一部、一三三—一三六頁。

(35) Das Kapital, I, S. 119. 訳、第一部、一三五—一六頁。

(36) Das Kapital, I, S. 120. 訳、第一部、一三六頁。

(37) Das Kapital, I, S. 120. 訳、第一部、一三六頁。

(38) 『価値論研究』安部隆一、三一頁参照。

(39) Das Kapital, I, S. 120. 訳、第一部、一二七頁。

(40) 名4, Hilferding, "Das Finanz Kapital" S. 25. 訳書、林要氏訳、大月書店「金融資本論」四〇頁、を参照。

(41) Das Kapital, I, S. 121. 訳、第一部、一二七頁。

(42) Das Kapital, I, S. 124. 訳、第一部、一二四—一二五頁。

(43) Das Kapital, I, S. 44. 訳、第一部、一二〇頁。

なお、『Kyvik』S. 6. 宮川氏訳、二六頁。『価値論研究』安部隆一、四七頁。『経済と社会』福井孝治、三七六頁以下参照

「商業資本実存条件としての商品流通（市場）について」(1)（谷川）

- (44) 「Kritik」S. 39. 宮川氏訳、六二頁。
- (45) Das Kapital, I, S. 46. 訳、第一部二二四頁。
- (46) 「Kritik, S. 39. 宮川氏訳、六二頁。
- (47) Das Kapital, I, S. 116. 訳、第一節、二三〇頁。
- (48) Das Kapital, I, 1867. S. 756. 訳、安部隆一「価値論」研究」一三頁による。
- なお、河上肇博士は、「資本論入門」第五分冊、終末において、この一文を掲げそして、「かくて吾々は第二卷「資本の流通過程」の研究に入るべき順序に到達したのである。」と指摘されている。
- 更に、ありうるべき誤解をけるために一言、我々は、「資本論」第一巻の出発点としての商品が、「単純な商品」であると指摘したが、だからと云って、歴史的理論的な意味ではない。又、「資本論」第一巻の出発点としての商品が、理論的歴史的な規定をもつこと、又「原基形態」「細胞形態」としての商品でもあることを充分意識している。これらの点については「価値論」研究」安部隆一、第一論文、商品について、を参照。
- (49) ローゼンベルグ著、梅村二郎訳、「資本論註解」第三卷（開成社）一九頁。
- (50) Das Warenprodukt の Ware が長谷部氏訳では脱落、ミスプリントであろう。
- なお、安部隆一教授、福井孝治教授の御好意により、カウツキー版を参照した。カウツキー版も Warenprodukt となっている。
- (51) Das Kapital, II, S. 82. 訳、第二部、一一四頁。
- (52) Das Kapital, II, S. 83. 訳、第二部、一一五、一二三頁。
- (53) Das Kapital, II, S. 83. 訳、第二部、一一六頁。
- (54) Das Kapital, II, S. 131-2. 訳、第二部、一七八頁。
- (55) 「資本の循環と一般的商品流通形式」これは経営学会関西西部会で発表。この小論の後に発表する予定。
- (56) Das Kapital, II, S. 24. 訳、第二部、三八頁。
- (57) 「マルクス資本論遺稿」直接的生産過程の結集—淡徳三郎訳、研進社版、一九五頁。なお、原本入手不可能のため、原文はみていない。
- (58) Das Kapital, I, S. 206. 訳、第一部、三五八頁。
- (59) 「商品で表示される労働」II「私的諸労働の二重性格」が、単純な商品生産、協業、分業にもとづく協業、大工業においてそれぞれ実存形態は変化する。この点についての指摘がこの一文の前提となっている。